

町と田舎



日高 敏隆

あえて「淡海」とはいわなくとも、話がつい「滋賀の未来」に及ぶことはしばしばある。

そんなときの結論は、「滋賀はやっぱり適当に田舎で適当に町なのがいいな」ということになるようだ。

これはずいぶんいい加減な結論のようにも聞こえるが、ぼくはこれに心から感じ入ってしまうのである。なぜならば、「適当に、田舎であり、適当に町である」のはじつに大変なことだからだ。

今から六十年近く前、ぼくが育った東京の渋谷は田舎ではまったくなかった。そこには田んぼも畑も林もなく、地蔵さんもなかった。といってそこは町でもなかった。そのころすでに道は舗装されていたが、それに面して何の表情もない家がつづいてい

るだけだった。ところどころにお店はあるが、ただ何かを売っているというだけで、町らしい活気などはなかった。といってそこは落ち着いた住宅地でもなかった。そこには古くからの文化などは何一つ感じられず、といって新しい文化が興りつつあるわけでもなかった。だからぼくは、日本には文化というものはないと、子ども心に思っていた。

ひところ人々は、田舎であることをやたらと嫌い、少しでも早く町になろうとした。西洋の町を真似て安っぽい広場を作ったり、街路樹を植えたりした。

その結果、日本の多くの場所は、そこらじゅうがコンクリートで埋め尽くされただけの、田舎でも町でもないものになり、文化は消えてしまった。

滋賀はこの道を歩んではならないとぼくは思う。「適当に田舎で、適当に町になる」——このことばにぼくが深く感じ入ってしまうのはそのためである。

(滋賀県立大学学長)